

松 山 大 学 論 集
第 30 卷 第 4 - 1 号 抜 刷
2 0 1 8 年 10 月 発 行

星野博士の学問と松山商科大学の歴史（その 1）

—— ある進歩的民法・民法典研究者の学者人生 ——

川 東 靖 弘

星野博士の学問と松山商科大学の歴史（その1）

—— ある進歩的民法・民法典研究者の学者人生 ——

川 東 埤 弘

目 次

はじめに

第1章 生誕から松山高商教授就任まで

第2章 松山高商～経専教授時代

第1節 加藤彰廉校長時代

第2節 渡部善次郎校長時代 (以上、本号)

第3節 田中忠夫校長時代 (以下、次号)

第4節 伊藤秀夫松山経専学校長時代

第3章 松山商科大学教授時代

第4章 松山商科大学学長時代

第5章 再び松山商科大学教授に戻って

おわりに

は じ め に

星野通（はしの とおる 1900年～1976年）は、松山商科大学の初代学長である伊藤秀夫の病気辞任を受け、1957（昭和32）年2月学長代理となり、同年4月2代目の学長に就任し、1963（昭和38）年12月まで学長職を6年9ヶ月務めた。

星野通は『明治民法編纂史研究』で本学最初の博士号（法学博士）を取得した著名な法律学者であると同時に戦後創設期の松山商科大学の礎を築いた伊藤秀夫に次ぐ第2の学園の功労者である。

星野通は「民法典論争」の研究で夙に全国的に有名な学者であるが、その研

究は戦前の松山高等商業学校・松山経済専門学校教授時代になされた。他の教授陣が学校の要職につき校務に多忙な中－例えば、田中忠夫は若くして松山高商第3代校長になり、伊藤秀夫は長らく生徒課長そして第4代校長を務め、大鳥居蕃は星野より若いが教務課長を長らく務めたのに対し、星野通は比較的恵まれ、校務も図書課長ぐらいで、専ら教育と研究に精を出し大いなる成果を挙げた。

星野通は20歳代前半～30歳代にかけては、法学の授業・教育に専念し、その教科書も発刊した。そして、30歳代末からは明治民法編纂史と民法典論争の研究に専念し、『松山高商論集』に毎年の如く論文を発表し、また、1942（昭和17）年8月、11月に松山高等商業学校商経研究会の研究彙報『民法典論争資料集（上、下）』を発表し、それらをまとめたのが、1943（昭和18）年9月ダイヤモンド社から刊行の『明治民法編纂史研究』であり、1944（昭和19）年6月日本評論社から刊行の『民法典論争史』である。星野42～43歳のときであった。戦時下、星野通がいかに研究に専念していたのかが窺われる。その後も、星野通は明治民法編纂史ならびに民法典論争の研究を深めていき、1949（昭和24）年6月河出書房から『民法典論争史－明治家族制度論争史－』を出版した。

また、1952（昭和27）年からは、慶応大学法学部教授の中村菊男・手塚豊との間で明治民法論争を繰り広げ、学界からも注目された。

星野通が松山商科大学の学長になったのは、1957（昭和32）年4月である。学長代理（同年2月）ならびに学長になると学内諸規程の整備を行ない、学校運営の民主化をはかった。すなわち、学長選考規程の制定（1957年3月）、名誉教授規程の制定（1957年4月）、学科成績選考規程の制定（1958年2月）、就業規則の施行（1958年4月）、学科履修規程の制定（1958年4月）、外国留学・内地留学規程（1958年4月）、職員定年規程の制定（1959年4月）、聴講生・委託生規程の制定（1961年4月）、経済研究所規程の制定（1961年6月）、合同教授会規則の制定（1962年4月）、経営学部教授会規則の制定（1962年4

月）、教員選考規準の制定（1962年12月）、経済学部教授会規則の制定（1963年1月）等々。

施設も整備・拡大した。例えば、新食堂の建設（1959年1月）、新図書館の建設（1959年7月）、3号館建設（1962年6月）、寄宿舎・南溟寮を建設した（1963年4月）。また、1961年8月中小企業研究所も設立し（井上幸一の主導）、地域の大学として貢献せんとした。さらに、本館東側の土地を購入し、新しい正門を建設し、キャンパスを一新した。

教学方針面では、忠君報国主義の印象が強く、戦後殆ど語られることのなかった校訓「三実主義」を1957（昭和32）年4月に再興・復活し（真実・忠実・実用）、その定義を簡明に定式化した。

また、1962（昭和37）年4月、商経学部を発展的に解消し、経済学部と経営学部として独立させ、その後の本学園の飛躍的発展の礎を築いた。

さらに、1963（昭和38）年の創立40周年記念事業にあわせて、温山会が三恩人（新田長次郎、加藤拓川、加藤彰廉）の胸像を寄贈した際に、星野通が三恩人の碑文を記し（1963年11月）、三恩人を顕彰した。

以下、星野通の松山高商・松山経専・松山商科大学時代の教育者・研究者としての業績を紹介し、客観的冷静に考察するとともに、松山商科大学学長兼理事長時代の功績について考察することにする。

第1章 生誕から松山高商教授就任まで

星野通は1900(明治33)年10月1日、伊予郡郡中町灘町の神官星野章太郎・クラ夫妻の5人兄弟の長男として生まれた。弟に恒雄(後、東大経済学部卒、四国電力経理部長)、妹に博子(後、星野通の後輩・堀新一郎に嫁ぐ)、光子(後、若くして死去)、スマ子(片岡剛に嫁ぐ)がいる。

星野通は灘町の小学校を卒業し、1914(大正3)年4月愛媛県立松山中学校に入学した。この中学校時代に前年5月松山中学校に英語教諭として赴任してきた伊藤秀夫¹⁾や真鍋良三²⁾から英語の授業を受け、わすれ難い印象が残っている。星野通は伊藤秀夫や真鍋良三の教え子であった。

中学時代に星野通は徳富蘆花や谷崎潤一郎などをむさぼるように読書した。後年、星野通は『愛媛新聞』に次のように記している。

「三、四年頃トルストイアン蘆花のものをむさぼり読んだ。自然と人生、青蘆集、寄生木等々。ことに思出記は表紙が手垢で黒くなるほど読んだ。五年生のときは一時谷崎に耽溺、名文『二人の雉子』などつかれたようになって読んだが、あの耽美主義、悪魔主義に何故あれほど心酔せられたか今以て判らない」³⁾

星野通は5年間の中学生生活を終えて、1919(大正8)年3月卒業した。第27期の卒業生で、124名が卒業した。同期に仙波直心(温泉郡川上村の地主)

1) 伊藤秀夫は1883(明治16)年9月19日松山藩の学者・伊藤奚疑の次男に生まれ、1902(明治35)年3月松山中学を卒業後、早稲田大学文学部哲学科へ進み、1906(明治39)年7月に早稲田を卒業し、1908(明治41)年12月北予中学に勤め、1913(大正2)年5月から母校の松山中学に英語教師として赴任した。後、松山高商教授、松山経専校長を経て、松山商科大学初代学長に就任する。

2) 真鍋良三は東京外語の出身で、1910(明治43)年3月英語の教師として松山中学に赴任した(～1918年6月)。真鍋は奇想天涯の英語教授方法で学生を引きつけ、大変印象が残っている(星野通『筆のすさび』昭和48年、119～120頁)。

3) 星野通「私の読書遍歴」『筆のすさび』昭和48年、88頁。

や野中重徳（後、松山高商教授）などがいる⁴⁾

1919（大正8）年4月、原内閣の高等教育機関拡充計画により、四国では最初、全国では12番目の官立松山高等学校が設立された。初代校長は京都の第三高等学校から由比質教授が迎えられた。6月に入試が行なわれ、星野通はこの松山高等学校文科乙類（ドイツ語が第1外国語）を受験し、160名（文科80名、理科80名）が合格した。星野は栄えある松高の第1期生であった。同期生に有吉義弥（後、日本郵船副社長）、上枝一雄（後、三和銀行頭取）、大前玉男（三井造船専務）、工藤良次（後、日立造船常務）、加藤雄一（後、松山郵政局長）、石丸友二郎（後、松山地方裁判所長）等がいる⁵⁾ また、星野通の1級下に上田藤十郎がいる⁶⁾

松高第1回入学式は9月11日に萱町2丁目にある松山市公会堂にて举行された。由比質校長は難関を突破した新入生に対し、「松高 über Alles（イーバーアルレス）」の標語を提唱し、「世界に冠たる松高の建設に向って邁進すること」を述べた。大正デモクラシーの風潮の中で、由比校長は質実剛健な校風の創造を教育方針に掲げ、自由で自主的な気風の養成を強調した。また、同時に「松高家族主義」を提唱し校長・教職員・生徒が一丸となって理想を実現することを目指した⁷⁾ 以後、自由闊達な精神、自治と自立の意識を尊ぶ松高自由主義の伝統がかたちつくられていくが、星野通はその創設期に松高で学んだ。

松高は全寮制である。星野通の松高入学当時、校舎も寮も出来ていなかった。授業は萱町の松山市公会堂の2階を仮校舎として行なわれ、また、寮は松山藩主の菩提寺の大林寺を仮寮として過ごした。翌1920（大正9）年8月、持田

4) 愛媛県立松山中学、松山東高同窓会『同窓会名簿』平成元年版。

5) 星野通「あこのころの松高－四十五年祭に思う－」『筆のすさび』昭和48年、177～180頁。

6) 上田藤十郎は1899（明治32）年11月15日高知県生まれ、1920（大正9）年9月松山高等学校文科乙類に入学、1923（大正12）年3月卒業し、同年4月京都帝大経済学部に入学。1926（大正15）年3月同大学を卒業後、同大学助手、日本経済史研究所所員、昭和高等商業学校教授等を経て、1949（昭和24）年4月松山商科大学教授となり、星野通の同僚となった。

7) 『愛媛大学五十年史』平成11年、5頁。

に新校舎が完成し、新校舎で授業を受けることができた。また、1921（大正10）年9月には持田に寮も完成し、大林寺の仮寮から移った。

松高創立当時の教授として、第一高等学校から来任したドイツ語の三並良⁸⁾や内務省から転じた北川淳一郎⁹⁾らがいて、星野通は三並教授や北川教授からドイツ語を学んだ。星野通は三並や北川の教え子・愛弟子であった。また、1920（大正9）年6月から東洋史学の重松俊章が赴任し、その魅力にとんだ講義を受け、星野通は学問的開眼を受けた¹⁰⁾さらに翌年の1921（大正10）年4月には渡部善次郎が拓殖大学から転じ英語教員として、また、伊藤達夫（伊藤秀夫の弟）が第五高等学校から転じドイツ語教授として赴任している¹¹⁾渡部と伊藤は星野通の学生時代1年間が重なっているが、渡部、伊藤から授業を受けたかどうかは不明である。

この松山高校時代に関し、星野通の興味深い、生き生きとした回想があるので、紹介しよう。

8) 三並良は1865（慶応元）年伊予国松山に生まれ、同郷の正岡子規の母の従弟。幼少の頃から子規と兄弟の如くすごした。松山変則中学校で草間時福のもと自由民権の気風を学び、子規の「五友」の一人。1883（明治16）年上京。獨逸学協会学校に入学、また1887（明治20）年に新教神学校に入学する。卒業後、普及福音教会を設立し、教会の機関紙「真理」の編集に携わる。1891（明治24）年に沓岐坂教会の牧師になるが、その後普及福音協会を離れて、ユニテリアン教会牧師となる。1908（明治41）年に第一高等学校教授に就任し、1919（大正8）年6月に一高教授から松高教授となる。

9) 北川淳一郎は1891（明治24）年4月温泉郡三内村に生まれ、松山中学・第三高等学校をへて1917（大正6）年東京帝国大学法科大学を卒業した。内務省に入り北海道に勤めた後、1919（大正8）年6月新設の松山高等学校教授に就任し、1947（昭和22）年まで松高教授を務めた。その恬淡さと進取性を以て学生を導き敬慕された。また、1921（大正10）年12月3、4日の『海南新聞』に「私立高等商業学校設立私案（上・下）」を発表し、それが契機となり、1923（大正12）年4月松山高商業学校が設立された（『愛媛県史 人物編』より）。

10) 重松俊章は1883（明治16）年愛媛県温泉郡久谷村生まれ。1913（大正2）年東京帝大史学科を卒業。1920（大正9）年6月松山高等学校教授。1927（昭和2）年から九州帝大教授。1944（昭和19）年退官し、石手寺住職。1949（昭和24）年4月松山商科大学教授（『愛媛県史 人物編』より）。星野通「重松先生の死を悼む」（星野通『筆のすさび』昭和48年、140～142頁）。なお、重松の松高就任は、『愛媛県史』では1919（大正8）年だが、星野通の「重松先生の死を悼む」では1920（大正9）年、また松山高等学校同窓会『写真集 暁雲こむる』（平成元年）でも1920年6月となっており、それにあわせた。

「旧制松高は大正八年に開校、最初の校舎はもとの出瀬町の旧市公会堂を転用したものであった。木造二階の粗末な建て物で、一階は教教室、事務室、講堂になっており、二階は四分されて文科甲、乙類、理科甲、乙類の四教室になっていた。学生は休憩時によく一階の屋根の上にて近くを通る小さい坊ちゃん列車を無心に、ながめたり、また寝ころんで読書し談笑したりした。

最初の寄宿舍は古町の大林寺であった。一年生のお大半がここに収容されて念仏堂・本堂・くり・書院などにそれぞれ分宿した。ここで、私たちは一年近く寮生活をしたわけだが、血気盛んなししかも茶目っ気の多い寮生は池のコイをとって食い、夕やみせまるころは、寺のツリガネをならして近隣の人たちをおどろかし、ウドン代の借金取りにはホースをむけて水をかけておもしろがったりした。夜半のストームもまた激烈をきわめ午前一時、二時には念仏堂・くり・本堂など夜打ちあさがけてたがいに襲撃しあい、白川夜舟の連中を竹刀（しない）でつぶしまわした。

持田の新校舎に移ったのは大正九年で、最初は本館だけが落成し、つづいて理科の特別教室ができ、しばらくして講堂ができたが、それは第一回卒業式にはじめて使用され、卒業式当日父を失った私はツイにこの講堂での卒業式に列することができず、心ひそかに涙したことであった。当時理科教室にはウルトラ・マイクロスコープとかいう日本でも珍しい顕微鏡がそなえ付けられたということを今に覚えている。

11) 渡部善次郎は1878（明治11）年4月6日愛媛県下浮穴郡田窪村生まれ。1904（明治37）年早稲田大学を卒業、ユール大学に入学し学位取得、帰国後1908（明治41）年東洋拓殖大学（現東洋協会大学）に勤め、1920（大正9）年帰郷、松山高等学校の講師となる。後、1923（大正12）年4月から松山高等商業学校教授。

伊藤達夫（たてお）は1887（明治20）年11月29日松山市生まれ。松山中学を出て、東京帝大文科卒。第五高等学校教授をへて、1921（大正10）年松山高等学校独文教授、翌年ドイツ留学。松高教頭。松高自由主義の校風を守った。1943（昭和18）年安倍能成の推挙で大阪高等学校長に就任。戦後の1948（昭和23）年松山中学校長、その後新制松山南高校の初代校長となり54年まで在職。男女共学下の民主的校風を打ち立て、職員・生徒の敬愛を受けた（『愛媛県史 人物編』）。

初代校長は三高教頭から来任された由比質先生だったが、まことに茫(ぼう)洋としてつかみどころのない大きい人物であり、また徹底したりベラリストでもあった。あの松高の自由の精神は最初、先生によって培養されたものとみてよい。

先生たちもいなかの高等学校には珍しく、ツブよりだというのが当時のジャーナリズムの評判であった。一高から来任されたドイツ語の三並先生、広島高師から来られた地理学の中目先生、英語の名須川、木方両先生などはいずれも学生の尊敬のまどであった。三並先生は松山市出身であり、新理想主義の哲学者ルドルフ・オイケン博士と親交があり、内村鑑三とともに並び称された有名なクリスト主義者であったが、私たちドイツ語クラスは先生にとくにかわいがられた。いま松山で弁護士をされている北川淳一郎先生も当時はサッソウたる青年教授であった。三並先生からちょうだいした先生あてのオイケン博士の手紙はいまなおまずしい私の書斎をかざっている。

一高には古くから自治の精神があり、また三高にははなやかな自由の伝統があったが、私たちの新しい学校にもそれはそれなりにいつとはなしに一つのエスプリが芽生えてきて、後年の松高精神のグルンドとなった。厳肅なる自由すなわちこれである。自他の人格と自由をきびしくみとめあって相犯さないという精神である。文科の学生はエリ章にLを、理科の学生はSをつけた。LはLiteratureのイニシャルであり、SはScienceの頭文字であることはもちろんだが、それらは同時にStern Liberty『厳肅な自由』のイニシャルをあらわした。私たちはいと高き誇りをもってこのL・Sをエリにつけた。そしてそれなればこそ白線はメーツヘエンのあこがれのまともになるのだとうぬぼれたりした。学生は城やまに拓川〔筆者注：石手川〕によくさまよった。そして広くよみ深く自由に考える典型的な学生生活を送ったが、楽しい思い出は数限りなくあった。山口高校との対抗野球戦の勝利の感激、三日間に及ぶ別子、今治方面への行軍…当時はまだ今治、

松山間には汽車は通じていなかった。…高浜沖のボートレース、一週間にわたりはでに行なわれ、校長が文部省にしかられた開校三年記念祭は忘れんとして忘れえない思い出である」¹²⁾

星野通は高校時代の読書遍歴について、後年『愛媛新聞』に次のように記している。

「社会思想書として心に残るものは河上博士の近世経済思想史論と山川均の社会主義者の社会観など。ただこれらの良書も懐疑的な青年をマルクスボーイとはしなかった。小説で面白かったのは漱石、随想、史論でよく読んだのは樗牛のもの位。明暗、心、三四郎等々とてもよかったが、樗牛の『亡弟良太を思う』『わが袖の記』など涙なしには読み得なかった。また史論平相国など今に残る。その他当時の高校生の例にもれず、レクラム版のゲーテ、ケルケル、ハウフ、シラー、クライストなどをたどたどしいドイツ語でよく読んだ。三十年後の今日書架に残る古ぼけたレクラム本を開けば、そこそこに鉛筆のアンダーラインが残っているが、そこにかりそめに引かれた線一つ一つもただ白きが上の黒きものに非ず、若き日の生命がそこはかとひそんでいると思えばたまらなくなつかしい」¹³⁾

高校3年の夏に、北九州を独り旅し、中津から柿坂まで歩き、耶馬の景勝を探っている¹⁴⁾

このように、星野通は多感な青春時代を由比校長下の松高自由主義の下で学び、マルクスボーイにはならなかったが、漱石、高山樗牛、ゲーテ等を読み、

12) 星野通「あこのころの松高－四十五年祭に思う－」『筆のすさび』昭和48年、177～180頁。

13) 星野通「私の読書遍歴」愛媛新聞、昭和27年10月22日。『筆のすさび』昭和48年、88～89頁。

14) 星野通「忘れ得ぬ旅の印象」『松山高商新聞』第125号、昭和12年6月20日。『筆のすさび』昭和48年、8頁。

まことに有意義な学生生活を送っていたことがわかる。

1922（大正11）年3月，星野通は松高を卒業した。しかし，卒業式の当日，星野通の父・章太郎が亡くなり，星野通は栄えある卒業式に出席できず，心ひそかに涙をながした。

1922（大正11）年3月15日，東京帝国大学法学部の入学試験があり（入学定員550名，志願者713名），合格し，4月法律学科独法科に入学した。この時の法学部長は山田三良（国際私法，国際法）であり，教授陣には土方寧（民法），小野塚喜平次（政治学），美濃部達吉（憲法），筧克彦（行政法），上杉慎吉（憲法），牧野英一（刑法），吉野作造（政治学），鳩山秀夫（民法），穂積重遠（民法），末弘巖太郎（民法），高柳賢三（英米法），田中耕太郎（商法）ら，助教授陣に南原繁（政治学），我妻栄（民法），蠟山政道（政治学），平野義太郎（民法）ら，助手に宮沢俊義（民法）ら錚々たる面々がいた¹⁵⁾ このうち，民法の穂積重遠は愛媛県宇和島市出身の穂積陳重（東京帝大法科大学長，枢密院議長等歴任）の長男である。

1922（大正11）年4月10日から第1学期（夏学期）の授業が始まった。法律学科の第1学期の必修科目は，憲法，民法（総則，物権，債権），商法，民事訴訟法（破産法を含む），刑法，刑事訴訟法であり，また，英吉利法・仏蘭西法・独逸法のうちの1科目であった。また，選択科目は経済学総論であった。第2学期（冬学期）は10月18日より始まり，必修科目は民法第二部（物権），民事訴訟法第一部（第一編乃至第五編），英吉利法第二部，仏蘭西法第二部，独逸法第二部であり，また，選択科目は国際公法第一部（平時），羅馬法であった。1923（大正12）年3月5日から17日にかけて学部試験が行なわれた。

1923（大正12）年4月，星野通は2年生となった。第3学期（夏学期）の必修科目は民法第三部（債権総論），商法第一部（総則，会社，商行為），民事訴訟法第二部（第六編以下破産法），英吉利法第三部，仏蘭西法第三部，独逸

15) 『文部省職員録』大正12年。

法第三部であり、また、選択科目は行政法第一部（総論）、国際公法第二部（戦時）であった。

1923（大正12）年の初夏、友人と伊豆大島に旅行した。純朴な人情風俗に接して心嬉しい旅であったが、帰途暴風雨にあい、300トン足らずのボロ船が木の葉の如く揺れ、「死ぬる思い」を体験している¹⁶⁾。

星野通が2年生の夏学期中の、1923（大正12）年9月1日、関東大震災が起り、法学部の多くの教室や研究室、学部事務室が全焼した。書籍も震災時に一部（4千冊）搬出されたが、それを除き、総て（4万5,000冊）が焼失するという大被害を受けた。そして授業も10月末まで休止となった。11月から焼け残った教室で授業が始まったが、本年度学期は11月末まで延長した。そして、12月1日より第4学期（冬学期）が始まった。必修科目は民法第四部（債権各論）、商法第二部（保険、手形、海商）、刑事訴訟法、英吉利法第四部、仏蘭西法第四部、独逸法第四部であり、また、選択科目は行政法第二部、国際私法であった。そして、学年末試験は1924年の4月に行なわれた。

1924（大正13）年4月、星野通は3年生となった。卒業の年である。3年生の第5学期（夏学期）は、遅れて5月1日より始まり、必修科目はなく、選択科目として法制史、民法第五部（親族相続）、海法があった。なお、6月に法学部長が山田三良から美濃部達吉教授に代わった。

この夏休みの期間中に、星野通は20世紀のアメリカの法学界の代表的人物で、ハーバード・ロースクール法学部長を長年務め、「社会法学」の体系者であったロスコー・パウンド（Roscoe Pound 1870～1964）の著書『法律哲学概論』（An introduction to the philosophy of the law）を翻訳している。10月中旬に訳し終わり、松高時代の恩師・北川淳一郎先生にその原稿の推敲をお願いしている¹⁷⁾。星野がいかに勉強熱心であったかが窺われよう。

16) 星野通「忘れ得ぬ旅の印象」『松山高商新聞』第125号、昭和12年6月20日。『筆のすさび』昭和48年、8頁。

17) 星野通・北川淳一郎共訳、ロスコー・パウンド『法律哲学概論』尚文堂、大正15年9月、はしがきより。

第6学期（冬学期）は11月1日より始まり、必修科目は無く、選択科目として法理史、西洋法制史、経済政策があった。

星野通は大学院に進まなかったため、指導教授たる「恩師」はいないが、「恩師」といえるのは民法の穂積重遠先生である。先生は円満かつ穏健な人格者で、穂積民法学説には先生の人格がそのままにじみでていた。ただ、星野通は学生時代に2度穂積研究室を訪問しただけだが、卒業後に研究をつうじて親しくなり、学界では「穂積門下」生と言われている¹⁸⁾。なお、星野通の1学年下に、後、九州大学教授になり、学位審査を行なう青山道夫がいる¹⁹⁾。

1925（大正14）年3月31日、法学部の卒業式が挙行政され、法律学科307名、政治学科217名、計524名が卒業し、美濃部達吉法学部長より卒業証書が授与された²⁰⁾。星野通も法学科を卒業した。

1925（大正14）年4月、星野通は郷里の松山高等商業学校（1923年＝大正12年設立）に加藤彰廉校長²¹⁾により法律学の教授（民法、債権総論等）として採用された。このとき24歳であった。星野通採用の事情は現時点でまだ未解明であるが、加藤彰廉校長が松高時代の恩師の北川淳一郎（北川は松山高商開設時から非常勤で勤務していた）から情報を得ていたものと思われる。

星野と共に、村川澄（1898年8月17日山口県岩国市生まれ。早稲田大学法学部卒、法学士、会社法、相続法等担当）も同時に採用された。法律学の専任

18) 星野通「親しめる学説－穏健な人格そのままに－」『筆のすさび』昭和48年、168～169頁。

19) 1902（明治35）年4月宮城県生まれ、1927（昭和2）年3月東京帝大法学部卒業。大学院に進み、大倉高商教授をへて1944（昭和19）年から九州帝大教授に就任。

20) 『東京大学百年史 部局史1』昭和61年、168～186頁。『東京大学百年史 資料二』昭和60年、405～408頁。

21) 加藤彰廉は文久元年12月27日（1862年1月26日）松山藩士宮城正脩の次男として江戸に生まれ、加藤彰家に養子に入り、東京大学文学部政治学及理財学科を卒業、文部省、大蔵省官吏をへて、山口高等学校教授、広島尋常中学校校長、市立大阪商業学校校長、市立大阪高等商業学校校長を歴任し、衆議院議員を経て、1916（大正5）年3月私立北予中学校長に就任し、1923（大正12）年4月松山高等商業学校校長創立に当り初代校長に就任していた（拙著『松山高商・経専の歴史と三人の校長－加藤彰廉・渡部善次郎・田中忠夫－』愛媛新聞サービスセンター、2017年3月、参照）。

教授としては、すでに前年採用の一柳学俊教授（京都帝大卒，文学士，法学士。論理学，心理学と共に法律も担当）がいるが，なぜ，1925年度に法律関係を2人も採用したのか，腑に落ちない点があるが，星野・村川の採用により，法律分野ならびに教員はさらに充実することになった。

第2章 松山高商～経専教授時代

第1節 加藤彰廉校長時代

1) 1925（大正14）年度

1925年4月1日，星野通は松山高商教授に就任した。

高商は3年目で完成年度の年にあたっていた。この時の松山高商の教授陣は次の通りであった²²⁾

職名	氏名	生年月日	担当科目	学歴	出身	就任年月日
校長	加藤彰廉	1862年1月26日		東京帝大文学士	愛媛	1923年3月3日
教授	佐伯光雄	不明	商業学	山口高商	愛媛	1923年4月1日
同	渡部善次郎	1878年4月6日	英語	早稲田・エール大	愛媛	1923年4月1日
同	西依六八	1882年	商品学	京都帝大理学士	佐賀	1923年4月6日
同	田中忠夫	1898年4月13日	経済学	東京帝大経済学士	岡山	1923年4月6日
同	古川洋三	1898年7月12日	留学中	関西学院高商部	愛媛	1923年4月×日
同	河内富次郎	不明	英語	フランク大学	岡山	1924年4月1日
同	一柳学俊	不明	法律	京都帝大文学・法学士	愛知	1924年4月9日
同	村川 澄	1898年8月17日	法律	早稲田大学法学士	山口	1925年3月31日
同	星野 通	1900年10月1日	法律	東京帝大法学士	愛媛	1925年4月1日

これらの教授陣の中では星野通が一番若い教授であった。田中忠夫，古川洋三，村川澄は2つ上であった。

1925年度の校務は佐伯光雄が教務課長，渡部善次郎が生徒課長を務め，加藤彰廉校長を補佐していた。また，河内富次郎が図書課長を務めていた。

22) 拙著『松山高商・経専の歴史と三人の校長－加藤彰廉・渡部善次郎・田中忠夫－』愛媛新聞サービスセンター，2017年3月，155頁。

1925年度の入学試験（本年度から定員増となり、募集人員約80名）は、3月に行なわれ、4月に入学式が行なわれ、83名が入学した。

星野通の1925年度の授業科目は民法であった。村川澄は会社法を担当した²³⁾。

5月13日に、一柳学俊が法律学研究のために英国オックスフォード大学留学の途についた。古川洋三につぐ2人目の留学であった。

6月、加藤彰廉校長は商学関係の教授として、大鳥居蕃（1901年5月29日滋賀県生まれ、東京商大卒、商学士）を採用した。1925年3月加藤彰廉校長に辞めさせられた重松通直²⁴⁾の後任である。大鳥居の就任で、大鳥居が一番若い教授となった。

9月22日、米国ウィスコンシン大学に留学していた古川洋三が帰国し、教授陣に加わった。

本年の秋－日時は不明だが－加藤彰廉校長は校訓「三実」の制定について教授会に諮った。「実用・忠実・真実」の「三実」である。この校訓は大鳥居蕃の後の回想によると、平凡で田中忠夫や大鳥居など当時の若い教員には大変不評であったようである²⁵⁾。

1926（大正15）年3月8日午前10時より本校講堂において、第1回卒業証書授与式が愛媛県知事香坂昌康や本校の設立者新田長次郎ら来賓多数を迎えて挙行された。卒業生は39名であった（後に追試で43名）。そして、このとき、加藤彰廉校長が祝辞の席上で、校訓として「一、実用(Useful)、一、忠実(Faithful)、一、真実(Truthful)」の「三実」を宣言した²⁶⁾以後、この「三実」は本校の校訓「三実主義」として定着していく。

23) 松山商科大学『松山商科大学三十年史』昭和28年11月、67頁。以下『三十年史』と略。

24) 重松通直は東京商大卒、商業学担当で開設時に採用されたが、資本論を教えているということで加藤校長により辞めさせられた。

25) 大鳥居蕃『松山商科大学三十年史』補遺『松山商科大学六十年史（写真編）』1984年、195頁。

26) 『松山高商新聞』第9号、大正15年4月12日。

2) 1926（大正 15）年度

1926 年度の校務も佐伯光雄が教務課長を、渡部善次郎が生徒課長を務め、加藤彰廉校長を補佐していた。また、古川洋三が図書課長に就任した。

1926（大正 15）年度の入学試験が 3 月 30 日と 31 日に行なわれ、4 月 8 日に 83 名の合格者を発表した。

1926（大正 15）年 4 月 14 日、星野通の母堂・クラが突然死去した。52 歳であった²⁷⁾

4 月 15 日に入学式が挙行され、授業が始まった。

本年度の星野通の授業科目は債権総論であった。村川澄教授は相続法を担当した²⁸⁾

同年 6 月上旬、星野通は東富^ふみと結婚した。富みは東京女子商業学校専門部教授法学士の東邦彦（星野通の東京帝大時代の同級生）の妹で、京都府立第一高等女学校出身の才媛であった²⁹⁾。結婚は通の母が亡くなったため、急遽決めたとのことであった。新居は、松山市一万町の市営住宅で、通・富み夫妻は弟、妹たちを引き取り、親がわりをし、弟を大学に、妹たちをみな女学校に通わせた。富みは理想的、完璧な女性であった（星野節子さんより聞き取り）。

同年 6 月、加藤彰廉校長は商業学関係の教授として、大阪高商時代の教え子・渡辺良吉を採用し³⁰⁾、また、9 月には英語の河内富次郎の後任と思われるが、英語担当として伊藤秀夫（松山中学教諭）を講師として採用した。伊藤秀夫は星野通の中学時代の恩師であった。

1926（大正 15）年 8 月、星野通は大学時代に翻訳し、北川淳一郎先生に推敲してもらった、ロスコー・パウンドの『法律哲学概論』を、学校の業務のかたわら間違いを訂正し、東京尚文堂から星野・北川の共訳として出版した³¹⁾

27) 『松山高商新聞』第 10 号、大正 15 年 5 月 15 日。

28) 『三十年史』67 頁。

29) 『松山高商新聞』第 12 号、大正 15 年 7 月 20 日。新聞では東富子となっているが、富みの間違いである。

30) 渡辺良吉は大阪高商卒、日本綿花カルカッタ支店長歴任。商業英語、貿易実務担当。

この時、25歳。星野通、最初の著書・翻訳書であった。

1927（昭和2）年3月8日、第2回卒業式が大講堂にて挙行され、38名が卒業した（後に追試で52名）。そこで、加藤彰廉校長が校訓「三実主義」（実用・忠実・真実）の簡明な説明を行なった。それは次の如くであった。

「出でては有為多能、行く所として可ならざるなく、実用的材幹を発揮し、己れの務めに対して忠実勤勉誠心誠意以て人の信頼を博し、入ては益々智識を研ぎ、徳を積み、真理を貴ひ、正々堂々俯仰天地に恥ぢざる底の人物たるの修養を怠らざらんこと」³²⁾

その真意は、有用な人物になること、人に誠実であること、真理を尊ぶこと、という簡明な定義であった。

3) 1927（昭和2）年度

1927年度の校務も佐伯光雄が教務課長を、渡部善次郎が生徒課長を務め、加藤彰廉校長を補佐していた。また、古川洋三が図書課長を務めていた。

1927年度の入試が3月30、31日に行なわれ、4月15日に入学式を挙行し、92名が入学した。

星野通は本年度の授業科目として、法律科目と財政学を担当した。そしてこの年の4月、法学通論の教科書『小さい法学通論』を広文堂より刊行した。はしがきで、法律学は法治国民として文化国民として当然知らなければならない必須的知識であるのに、ともすれば世間から疎まれ勝ちで、その研究に手を染めた人でも直ちに止めてしまう人が多いのは何故かを問い、それは従来の入門書が法律制度の定義や条文の羅列的摘記が多く、無味乾燥になっているのが原

31) 星野通・北川淳一郎共訳、ロスコー・パウンド『法律哲学概論』尚文堂、大正15年9月、はしがきより。

32) 『松山高商新聞』第17号、昭和2年3月28日。

因だとして、その通弊を除去し、法律学に対する好学心を引き起こすべく、法律学説の変遷、法律の運用、解釈の妙味、各種法律制度の存在意義、その歴史的考察等を論じ、法律学への興味を出来るだけ引き起こすべく著したと述べている。その目次は次の如くで、体系的な法学通論の教科書であった。なお、この著書は星野通の著作目録には収められていない。

「第一編 総論

第一章 法学通論の意義及び目的

第二章 国家

第三章 法一般に関する理論

第四章 権利義務

第五章 世界法系概観

第二編 各論

第一章 憲法

第二章 行政法

第三章 刑法

第四章 訴訟法

第五章 国際公法

第六章 民法

第七章 商法

第八章 国際私法」³³⁾

さらに本年7月、星野通は村川澄・一柳学俊と3人の共著で『民法講義案』（松山高等商業学校法学研究室）を刊行した。村川澄が『民法総則』、一柳学俊が『担保物権法』『債権法総則』、星野通が『債権各論』を執筆した。星野通ら

33) 星野通『小さい法学通論』より。

本校の法律担当教授の教育熱心さが窺われよう。なお、この著書も星野通の著作目録に掲載されていない。

星野通の『債権各論』講義案の目次は次の如くである。

「序説

第1章 契約

第1節 契約の意義及び種類

第2節 契約の成立

第3節 懸賞広告

第4節 競争締結

第5節 双務契約の効力

第6節 第三者のためにする契約

第7節 契約の解除

第2章 契約各論

第1節 贈与

第2節 売買

第3節 交換

第4節 消費貸借

第5節 使用貸借

第6節 賃借権

第7節 雇傭

第8節 請負

第9節 委任

第10節 寄託

第11節 組合

第12節 終身定期金

第13節 和解

第3章 事務管理

第4章 不当利得

第5章 不法行為」³⁴⁾

星野通一家は7月、松山市一万町から松山市持田町（県立農学校裏）に転宅した。³⁵⁾

星野通は『松山高商新聞』第22号、23号（昭和2年8月27日、10月15日）に「ドイツ憲法に於ける労働者保護の規定」という論文を掲載した。それは、ドイツワイマル憲法の社会民主主義精神、特に労働者保護の要点ならびに問題点を紹介したものであり、星野通も同様の考えであったと推察される。それは次の通りである。

「フランス革命の洗礼をうけた近代国家の憲法は国民の国家生活に於ける自由と平等を保証し政治的デモクラシーの実現を期して居る。然し誤った個人主義思想に胚胎する極端な自由放任主義が国民経済生活に於て金科玉条とされた結果は、社会民主主義の時代とも言ふ可き二十世紀に於て弱肉強食、殆ど無秩序に近い混沌の世界が経済世界に出現した。成程スミスの予言した通り十九世紀以来各国共に国富は異常なる程度に増加した。然し国家の富は集中してもそれは只一部資本家の手に集中するだけの事でその配分は不平等を極め、法律上は自由であり平等である筈の多数労働者が経済取引上の弱者たるの故に、自分の生産した富を事実上於て資本家に奪はれ日々どん底生活に、その生命の脅威と感じつゝあるが今日の社会である。此の多数労働者をして自己の正当なるワケ前を取得し、失はれた平等、うばはれたる真の自由を回復し、単に政治上のみならず、経済生活の方面に於ても真のデモクラシーを実現する事は階級意識の先鋭化する今

34) 村川澄・一柳学俊・星野通共著『民法講義案』より。

35) 『松山高商新聞』第21号、昭和2年7月28日。

日、解決に焦眉の急を要する社会問題であらねばならない。

ヨーロッパ大戦後、独逸露国等の憲法が国家の政治組織に関する根本法たるに止まらないで、進んで国民経済生活上の平等、自由回復による国民社会生活の安定向上を目的とするが為に外ならぬ。

千九百十八年十一月帝国主義国家たるドイツ帝国は亡んで社会民主主義を標榜する新しい共和国が生れた。此の革命の中心力となったのは多数労働者又はその指導者乃至その信頼を受けた人々であった。こふしたアトモスフェアの中に生れた新憲法が労働者擁護、経済的デモクラシーの実現を理想として居るものなる事は洵に当然過ぎる程当然の事実であらねばならない。

ドイツ憲法は此の経済的デモクラシー実現を期し、第五章経済生活（Wirtschaftsleben）第百五十一条に於いて国民経済生活上の理想乃至原則を宣言して居る。即ち同条に依れば、経済生活の秩序は各人をして人間としての価値ある生存（Menschenwürdiges Dasein）を得しむ事を目的とし、社会生活の正義に適合するを要し、経済上の自由は只此の限界内に於てのみ保証さるゝ事になって居る。之ドイツ国民の生活を人間らしからしめんとする根本的精神であつて、此の憲法上の保証あるによってドイツ国民は人間としての価値ある生存を維持し得、此の経済生活上によって拒否さるゝのである。自由は平等と相俟て始めて真の自由である。平等を害する自由は只名残の自由、謂はゞ放恣であつて所詮真の自由であり得ない。此の放恣が国法によって否認して居るのである。

否、彼は労働者に対し只に其最小限度の生活必要費を給与するにとゞまらず、更に進んで労働力利用に対し其の対価として充分の報酬を支払はねばならない、と言ふ法律上の義務を負担する。即ち剰余価値を全部うばう事によって行ふ搾取をなす可らざるの義務を負ふのであつて、此百五十一条こそ経済的平等主義の理想に向つて突進せんとする第一歩に外ならないのである。個人の労働力利用の機会を求めて自己の生存を維持せんとする

労働権（Das Recht auf Arbeit）、或は又相当の労働時間を要求し、障害疾病に対する保護を求むる等所謂労働者唯一の経済資本なる労働力の維持の権利（学者これを労働者中の権利（Das Recht bei der Arbeitと言ふ）、或は又労働に対し正当賃金を請求し、労働終る後労働者が快適なる生活を行ふ為に適當の安住処を求むる権利（ドイツ民法その他特別法は此種の規定が存して居る）、婦人労働者が労働後家政を処理せねばならぬ必要上時間の余裕をあたへられん事を請求する権利（ドイツ営業条例、農業、労働令等）、所謂労働後の権利（Das Recht nach der Arbeit）、之等諸種の労働者の権利は此百五十一条を基調として認容さるゝものである。

百五十一条の規定を置く同憲法は更に進んで百七十五条に於て個人の労働力は国家の特別の保護を享くべき旨を宣言して居る。私法自治を極端に許した結果は今日の経済的無政体状態を現出した。個人主義哲学に心酔して国民経済活動無制限に放任した挙句に此混乱時代が生じたのである。本条立法の理由は従来全く個人の自由なる競争に任せて置いた労働取引に国家が制肘を加へて以て真の意味に於ける国家経済生活の秩序を回復せんとするの点に有するのであって、結局は労働者をして人間的価値ある生活を行はしめんとする百五拾一条と此百五拾七条は同一精神のものなのである。

即ち此規定があるによって他人の労働力を利用するものは労働締結に際し国家の制肘をうけ、弱者の地位にあった労働者はその唯一の経済資本たる労働力に対し国家の保護をうけ得るのである。

但し此労働力保護を行ふ為めに具体的な統一労働法典を設くべき事を百五拾七条第二項は言明して居るが、法典編纂が困難なる事業である関係上未だその統一法典の制定を見ず、只従来の労働法規の部分的な改廃を行なひ或は各個の場合に適當なる単行法律を發布して一般に労働者階級の要求に応じて居るに過ぎない有様である。一九一八年共和国成立以来制定された各種労働法規の数は実におびただしき数に上って居ると称せらるる

(続く)』³⁶⁾

1927(昭和2)年10月15日、加藤校長は佐伯光雄教授(教務課長)を会計学研究の為に英国ロンドン大学に留学させた。古川洋三、一柳学俊につぐ3人目の留学であった。佐伯教務課長の後任は英国留学から帰っていた一柳教授が務めた。

1927(昭和2)年11月14日から12月23日まで文部省主宰の成人教育講座が二番町松山高小学校において開催され、星野通は、一柳学俊、田中忠夫と共に、毎週1回、午後6時より8時までの2時間、6時間分を講義した。一柳学俊は広告心理学について、田中忠夫は我国現下の金融問題について、星野通は信託法について、信託の意義、期限、信託の禁止制限、信託の公示方法、信託財産、信託当事者の権利義務、信託の監督、公益信託を講義した。³⁷⁾

『松山高商新聞』第24号(昭和2年11月20日)が、田中忠夫と星野通について「若さに輝く新進二教授、『経済思想史』の著者田中経済学士、『小さい法学通論』の著者星野法学士」と題して、教授紹介をしている。大変興味深い紹介であるので、全文を紹介しよう。

「『マーシャルはこれについてこう申して居ります…』敬虔なクリスチャン、真面目な教授として評判のよい田中忠夫先生は淡々として尽きざる蘊蓄を傾ける、虹のような熱弁、驚くべき博識に魅了されて了ふ。教授の時間はほんとうに愉快なものだ。教授は岡山の人、三高を出て東大経済学部を出ると直ぐ本校教授となり創立当初より経済科主任として斯学の研鑽、子弟の教養に余念がない。重松前教授等と計って学生の有志を糾合し、経友会を組織されたのも教授である。今も尚会を主宰して経済学研究に学生を指導されて居られる。近來はよく各地の講演会に招聘されるようだ。漸

36) 『松山高商新聞』第22号、昭和2年8月27日、同第23号、10月15日。

37) 『松山高商新聞』第24号、昭和2年11月20日。

く社会的に活動されて来てよろこばしい。

教授と同じ東大を出て『ちいさな法学通論』を著はして認められた新進教授に法学士の星野通氏が居る。本県の人、松中を経て松高に入り同高で北川教授に習ったと言ふのだから、その若さは想像がつく。ドイツ語がお得意であり、学校では法律と財政も担当されている。北川教授の愛弟子の一人である。教授は校友会の音楽部長としてベトーベンやジンバリストの二代目を引具して或は東予に或は南予に妙なるメロデーに地方人を酔はしたりする。田中教授は庭球の名手、夙に庭球部長としてその発展に専心されている。

星野、田中両教授とも未だ前途洋々たる青年教授、而も熱心な学究者である。従来益々学界の為、地方教育界の為貢献せらるゝところが多々あるであらふと信ずる」³⁸⁾

星野通は「ドイツ憲法に於ける労働者保護の規定」の続きを『松山高商新聞』第25号、昭和2年12月20日、ならびに第26号、昭和3年1月23日に掲載した。その大要は次の通りである。

「私は前号に於て主として労働者の個別的権利について述べた。以下更に進んで独憲法に於ける労働者の団体的権利に関する規定について述べてみたい。

独憲法に於ける労働者の団体的権利に関する主たる規定は百五十九条及び百六十五条である。

個人主義的自由思想がヨーロッパ大陸、否、全世界を風靡し始むると共に契約自由の原則は私有財産制度と相並んで経済生活の根本的制度となり、そして古代ゲルマン法時代の団体的或は社会的傾向は全然影をひそめ

38) 同。

て近世ドイツ法制においては労働者の団結は重き刑罰の下に固く禁じられていたのだった。

然しながら時と、もに機械工業は益々発達して第二次的産業革命に入つたとさへ称せらるゝ事になった。又経済取引の強烈さは益々深刻になって来た。そして二十世紀の現代においては彼の無制限なる自由放任制度は至る処に弱肉強食の経済的無政府状態を惹起せしむる様になり、今や経済力の優越を誇る資本家階級は自己の実力を利用して契約自由の美名の下に微力の労働者を事実において圧迫して不当なる労働取引を行ふて居る有様である。

だが微力なる労働者と雖も拱手して何時まで不遇に甘んずるものでない。自己一人で到底同等に資本家に対抗し得ない事を知った彼等は遂に衆を頼んで自己の主張を正当に貫徹せんとするに至った。近世労働者団結運動、即ち之である。

此の滔々たる時代的潮流に逆行し得ず、独政府は先ず世の要求を入れて営業法において労働者団結禁止法の規定及びその刑罰規定の廃止を行ひ、消極的ではある労働者団結の違法ならざるを宣言したのである。次いで一九一八年革命なつて共和国の新ドイツ生るゝと共に一九一九年には新憲法施かれ、その中において労働者の団結権は合法なる事を積極的に宣言さるゝと共に労働者団体の権利義務、任務などに関する規定も設けられたのである。その主たるものが前記百五十九条及び百六十五条である。今その内容を摘記すれば

第百五十九条

『労働条件及び経済条件の維持及び改善のためになす団結は何人に対し又如何なる職業に対してもその自由を保障す。此自由を制限し又は妨害せんとする約定及び規定は総て違法とす』

第百六十五条

『労働者及び被傭者は企業者と同等の権利を以て相共同して労働条

件の規律、並びに生産力の全経済発達に参与するものとす。両者いずれの側においても組織及び連合をなす事を承認す。

労働者及び被傭者はその社会上経済上の利益を防護する為に産業別労働者会議、経済区域によりて分たる地方別労働者会議及び国労働者会議を以てその法律上の代表者とす。

地方別労働者会議及び国労働者会議は企業者その他の関係ある階級の代表者と共に全経済任務を遂行し及び国経済会議を組織す。この地方別及び国経済会議は総て重要な職業集団がその経済的社会地位に相当する代表者をその会議の中に有する様組織せらるゝを要す。

社会政策及び経済政策に関する法律案にして基本的意義を有するものに関しては国政府は国経済会議の意見を聞く事を要す。国経済会議は自ら此種の法律案につき建議をなすの権利を有す。国政府が之に同意せざる場合においても猶自己の意見を添へて国会議に提出する事を要す。国経済会議は其議員を一人議會に派してその提案を表せしめ得。

労働者会議及び経済会議には指定区域内において監督及び行政の権限を委任する事を得』。

以上の二個の規定を通読して先づ第一に知り得る事は労働者が労働条件の維持乃至向上の為には団結々社をなし得る憲法上の基本的権利を享有し得る事、従て団体的取引のコロラリーとして当然に労働取引上の懸引たる罷業権が憲法上許容されざる可らざる事である。

第二に知り得る事は労働者が結社団体をなして自己の主張を貫徹せんが為には労働団体を組織する労働者中其代表者によりて組織さるゝ処の労働者会議によって之をなす可き事。

然して此労働者利益の代表機関たる労働者会議は企業家と更に経済会議を組織して国家の社会政策的経済政策的立法にも或程度まで参加し得る事等である。

以下順を追ふて此二規定の解説を試みんとする。

独憲法は百五十九条に於て労働者の団結権を明文を以て認めた。即ち労働条件経済条件の維持乃至向上の為には労働者は自由に団体を造つて労働取引を行ひ得るのである。

此労働者団体取引権の是認はその当然のコロラリーとして罷業権の許容されざる可からざる事を暗示するものと言ひ得る。

元来、此労働者団結取引権の許容さるゝは既述の如く金力の優越を誇る資本家に対して対等の太刀打ちのできる為、言ひ替えへれば労働者をして資本家と対等の取引をなさしめんが為である。処が此の団体取引も通常の個人取引と、取引たる点に於て本質上何等差異あるものでない。従て普通個人取引に於て各種取引が許さるゝ如く、団体取引に於ても固有の取引たる団体的罷業が憲法上当然に許容されねばならない。換言すれば、労働者の団体取引が合法視さるゝ限りその取引として行はるゝ罷業も当然に合法視されねばならない事になるのである。即ち此意味に於て罷業権は独逸憲法上許容さるゝ一つの基本権、自由権の一種と言ひ得るのである。

以上に於て極めて大略乍らドイツ憲法の罷業権是認の根拠を説いた。以下、労働者の組織たる各種労働者会議及び各種経済会議の組織機能等につきて述ぶる事とする。

一九一八年十二月憲法制定に先つて革命政府は *Verordnung über Tarifvertrag* を發布して労働者委員会及び使用人委員会 *Arbeiter und Angestelltenausschüsse* の組織を認めた。即ち此の委員会の目的は此等委員会の代表する或る工場或は事務所等に於ける労働者使用人の利益を雇主に対して確保し又労資両者の間に於て雇傭契約を円満に行はれしむる事に存し、二十人以上の労働者或ひは使用人の存在する工場或ひは事務所に於て必ず組織さるべきものであった。

だが、一九一九年の憲法は更に進んで個々の工場に於て組織さるゝ労働者或ひは使用人委員会より一層大なる権限を有する委員会或ひは会議制度を組織して以て労働者の経済生活の向上を企図したのであった。憲法百六

十五条の規定即ち之である。

之れに依れば労働者は其社会上経済上の利益を守る為に同一産業に従事する者相協同して産業別労働者会議 *Betriebsarbeiterräte* をつくる、又之等産業別労働者を打って一丸となして地方別労働者会議を構成し、更に此の地方別労働者会議を結合して大々的な国家的会議即ち国労働者会議を形造りて、以て思間〔筆者注：労働者の間違いか？〕の共同意思をより力強く主張する事ができる。即ちかくして労働者は小は各産業別より、大は全国的にまで大連合大組織をつくって資本家に対抗し得るのであって、之等各労働者会議は労働者或ひは使用人の法律上の代表者 *Gesetzliche Vertretungen* として彼等の社会上経済上の各種利益を擁護するのである。

以上の労働者会議以外に前述の憲法上の団結権（百五十九条）に基いて労働者は同種の利害関係を有するもの相寄て自由意思に依り労働組合 *Arbeitsnehmerverband* をつくり得る。之等労働組合はその所属組合員の利益を代表して資本家に対し或ひは又国家に対しその要求を貫徹するを以てその固有使命とする。即ち利益を共通にする労働者の団体的取引を行はんが為の結合なるが故に共同行動はその本来の任務であり、従って時と場合によれば団体して罷業或ひは怠業等を取引上の懸引手段として行はねばならない事も生じて来るのである。従来之等労働組合は労働争議ある毎に諸種の形式を以て組織されたのであったが、国家及び資本家はそれを労働者の合法的代表機関として認めなかった。新憲法制定と、もに此の労働組合の存在が許容され労働者を代表する権能を賦与さるゝに至りしは元よりの事である。

以上は労働者が自己の利益主張の為に組織する会議制度乃至団体であるが、之の外に労働者は雇主と協力して経済会議等を組織し以て労資両者の協調互譲了解によって国家生産の発達をはかると、もに自己の経済生活の向上を期し得る。

即ち地方別労働者会議及び国労働者会議は資本家其の他関係ある

階級の代表者と相合同して国家の全経済的任務を遂行し、社会化法 *Sozialisierungsgesetz* の執行に協力する為めに地方別経済会議及び国家経済会議 *Bezirkswirtschaftsräte oder Reichswirtschaftsräte* を組織することが出来る。

これ等二種の経済会議は労資協調による全経済的任務の遂行を以てその本来の使命としているものであるが、此中国家経済会議は国家が国議会に提出する社会政策的経済政策的に関する法案につき意見を提出し得る権能を持っているのであって、国家政府はこれ等の法律案を議会提出前に国経済会議に提示して、その意見を求めねばならないことになっている。又同会議は消極的に意見に答ふるに止まらず更に進んで此法律につき建議をなすの権利を有しているのであって、国家政府が此建議に同意せざる時はその建議に自己の意見を加へて同会議にこれを提出するを要する。而して此際同会議は其議員を一人国議会に派してその提案建議を代表せしむる事になっているのである。

即ち、要約して言ふならば、此経済会議は先ず第一に労働者が資本家企業家と相共同して会議を組織し資本家と対等の地位に於て共同生産者たらしんとする事、換言すれば従来の資本家の生産独占を打破してインダストリアルデモクラシーを実現せん事を期するものである。

第二に此経済会議、特に国経済会議は広範なる立法的権能を与へられ、社会政策経済政策に関する法案につきて意見を述べるのみならずそれに関する建議さへなし得る事になっているが、その理由は国民経済生活社会生活についての国家立法乃至行政をしてよく国民生活にアンパツセンセしむると言ふ事に存するものである。

以上革命ドイツに於ける憲法上の労働法規の大略であるが労働契約が個人法の域を脱して団体法的集合的領域に移り行きつゝある傾向が明らかに窺知し得らるゝであろう。労働者の団結権が認められ、労働者をして此団結権のカテゴリーの下によく集团的活動もなし得、以て自己の利益を充分

に主張せしめんとするの点に於て此ドイツ新憲法は二十世紀革命の旗じるしとしてその特色最も鮮やかなものであらう。

たゞ同憲法は『国は統一労働法典を制定す』と宣言しているものゝ、如何なる理由にや、今にこれ等憲法上の基礎的労働規定をグランドとする各種具体的労働法規の統一制定を見ず、依然として多数法律命令の無秩序なる集積の旧態をそのまゝとどめているのは遺憾のいたりである。（終り）³⁹⁾

1928（昭和３）年３月８日に第３回卒業式が挙行され、56名が卒業した（後、追試で67名）。加藤校長は、式辞で、大正９年以降不景気が続き、また、昨年金融恐慌が起り、国民生活及び国家の前途は多難であるが、校訓「三実主義」を持し、３年間に得た知識を応用し、心を正しく身を慎み、有用な人物になられんことを願うと述べた⁴⁰⁾

４）1928（昭和３）年度

1928年度の校務は一柳学俊が教務課長を、渡部善次郎が生徒課長を務め、加藤彰廉校長を補佐していた。また、古川洋三が図書課長を務めていた。

1928年度の入試が３月30、31日に行なわれ、４月初めに合格発表をし、４月16日に入学式を挙行し、103名が入学した。加藤校長は式辞のなかで、校訓「三実主義」の意義、入学後の覚悟について述べた⁴¹⁾

1928年度の星野通の授業科目は民法（３年）、財政学（３年）、信託（２年）、ドイツ語（１、２、３年）であった。なお、法律の村川澄は商法（２、３年）と民法（１、２年）を担当し、一柳学俊は法学通論（１年）、論理学（２年）、心理学（１年）を担当した⁴²⁾

39) 『松山高商新聞』第25号、昭和2年12月20日、第26号、昭和3年1月23日。

40) 『松山高商新聞』第28号、昭和3年3月21日。

41) 『松山高商新聞』第29号、昭和3年4月23日。

42) 『松山高商新聞』第28号、昭和3年3月21日。

8月31日には、前年度御大礼事業として着工した講堂及び図書館の建築が竣工し、二階、三階を講堂とし、階下を図書館とした⁴³⁾

さらにまた、御大礼記念事業として、学校では、①故加藤拓川氏の胸像建設及び奨学資金創設、②大運動場の拡張を計画し、また、温山会では9月9日の総会で新田長次郎胸像建設をきめた⁴⁴⁾

9月29日から10月1日までの3日間、加藤彰廉校長は創立5周年記念祭を挙行した（会長加藤彰廉、副会長渡部善次郎）。校友会の各部で種々の催し物が行なわれた。

1929（昭和4）年3月8日に、第4回卒業式が挙行され、79名が卒業した（後、追試で82名）。加藤校長は式辞で、正義を持ち、誠を以て、校訓「三実主義」の精神を実行せよと述べた⁴⁵⁾

5）1929（昭和4）年度

1929年度の校務は一柳学俊が教務課長を、渡部善次郎が生徒課長を務め、加藤彰廉校長を補佐していた。

1929年度の入試が3月30、31日に行なわれ、4月初めに合格発表をし、4月15日に入学式を挙行し、99名が入学した。加藤校長は式辞で専門学校の学生として今後進むべき道を訓辞し、温厚溢れる慈父のごとく校訓「三実主義」の意味を述べた⁴⁶⁾

1929年度の星野通の授業科目は民法（1，3年）、財政学（3年）、信託（2年）、ドイツ語（1，2，3年）であった。なお、法律の村川澄は法律（2，3年）を担当し、一柳学俊は法学通論（1年）、哲学（3年）、論理学（2年）を担当した⁴⁷⁾

43) 『松山商科大学五十年史』財界評論新社、1974年3月、100頁。以下、『五十年史』と略。

44) 『松山高商新聞』第33号、昭和3年9月29日、『五十年史』102～103頁。

45) 『松山高商新聞』第39号、昭和4年3月26日。

46) 『松山高商新聞』第40号、昭和4年4月25日。

47) 『松山高商新聞』第39号、昭和4年3月26日。

5月1日、加藤校長は増岡喜義を講師として採用した。増岡は松山高商の第1期生で1926年松山高商を卒業し、九州帝大法文学部に入学し、1929年3月卒業した。本校教員採用の第1号であった。担当は財政学であった。

6月4日、加藤校長は伊藤秀夫教授をイギリスに留学させた。4人目の留学であった。

同年6月上旬、星野通夫妻は松山市持田町から歩行町に転居した⁴⁸⁾

10月11日、加藤校長は新田長次郎、故加藤拓川の銅像除幕式および前年竣工した講堂・図書館の落成式を挙行了。この式典に新田長次郎、加藤拓川未亡人を始めとして、多数の来賓が出席した。加藤校長の挨拶のあと、新田長次郎、加藤未亡人、知事、市長らの挨拶が続き、最後に井上要理事が「新田氏は本校創立の母とすれば故加藤氏は本校の父なり」と両氏を讃えた。後、講堂落成式、胸像除幕、祝賀宴が行なわれた⁴⁹⁾。なお、両銅像は本館の中庭に向い合って置かれた。

10月12日に、温山会が新田長次郎氏の歓迎会を午後6時から市内亀之井にて開催した。加藤校長、渡部善次郎教頭らと共に星野通も出席した⁵⁰⁾

10月21日に、星野通・富み夫妻に長男が生まれた。陽と名付けられた。

1930（昭和5）年に入り、前年のアメリカの大恐慌が世界に波及し、世界恐慌となり、また、日本に波及し、昭和大恐慌に発展していった。時の内閣は浜口雄幸民政党内閣である。蔵相は井上準之助で、その金解禁、緊縮政策が昭和恐慌に拍車をかけた。そして、就職難が到来した。

『松山高商新聞』第50号（昭和5年1月25日）は、本年の卒業期を控え、就職難の記事「就職地獄。不景気のドン底に投げ込まれて、卒業生よ何処へ行く、売れるは運動選手ばかり、果然為す所を知らぬ卒業生」との一文を載せている。そこで、加藤彰廉校長ら学校当局は以前から何度も上阪し、各会社、商

48) 『松山高商新聞』第41号、昭和4年5月25日。

49) 『松山高商新聞』第47号、昭和4年10月25日。

50) 同。

店を訪問，交渉したが，余り芳しくなかったと報じている⁵¹⁾

1930（昭和5）年2月10日より3月8日まで，松山高等小学校にて文部省主催の成人講座が開催されるが，本年も田中忠夫が「経済生活の改善」，一柳学俊が「社会問題概説」とのテーマで講義するが，星野通はしていない⁵²⁾。おそらく，次の著書『法学通論概説』の出版準備に専念していたものと推測される。

1930（昭和5）年3月8日，第5回卒業式が挙行され，75名が卒業した（後，追試で88名）。加藤校長は式辞で昭和恐慌下の就職難を報告し，3分の2しか決まっておらず，世は陰悪，社会生活は艱難多いが，少しの油断もせず，奮闘努力，不撓不屈，「三実主義」を実行し，一路己の目的に邁進せよと激励した⁵³⁾。

1930（昭和5）年3月24日，加藤校長は田中忠夫をドイツに留学させた。伊藤秀夫につぐ5人目の海外留学派遣であった。

6）1930（昭和5）年度

1930年度の校務も一柳学俊が教務課長を，渡部善次郎が生徒課長を務め，加藤彰廉校長を補佐していた。

1930年度の入試は3月27，28日に行なわれた。募集人員は昨年と同様100名で，志願者は不況の影響で前年（427名）より大幅に減少し，345名であった。そして4月始めに合格発表を行ない，4月中旬入学式を挙行し，104名が入学した。

1930（昭和5）年4月，加藤彰廉校長は法律の担当として浜田喜代五郎を助教授として採用した。浜田喜代五郎は，松山高商第1期生で，1926（大正15）年に卒業し，九州帝大法学部に進学していた。前年に採用した増岡喜義に次ぐ本校出身の2人目の教員であった。浜田の採用により，法律学は一柳学俊，村

51) 『松山高商新聞』第50号，昭和5年1月25日。

52) 同。

53) 『松山高商新聞』第52号，昭和5年3月25日。

川澄，星野通，浜田喜代五郎の4名に増大した。

1930年度の星野通の授業科目は法律科目とドイツ語で，財政学は増岡喜義に代わったものと思われる。

同年4月，星野通は著書『法学通論概説』を東京広文堂から出版した。それは『小さい法学通論』の改訂版であった。その目次は殆ど変わらず，第一編の第五章の世界法系概観を第二編各論の第一章にまわしただけであった。

7月，星野通は福岡での全国高専大会西部予選会に庭球部を引率した。だが，その遠征中に，令息・陽が急病のため急遽帰国している⁵⁴⁾

11月10日から12月11日まで文部省主催の公民講座が松山高等小学校にて開催され，佐伯光雄が「会計学上よりする銀行会社の鑑別法」，増岡喜義が「我国現時の経済状態」とのテーマで各5回講義するが，星野通は登壇していない。だが，星野は法律相談には活動している⁵⁵⁾

1931（昭和6）年も昭和恐慌が続き，軍部によるクーデター計画（未遂）が起こるなど社会不安の時代がつづいた。

3月8日に，第6回卒業式が挙行され，82名が卒業した（後，追試で92名）。加藤校長は式辞で昭和恐慌下の国難，思想国難，経済困難の深刻化，就職難，多事多難な世だが，失望すること無く，誠意を以て事にあたり，「三実主義」の実践を望むと激励した。後，温山会の新会員歓迎会が合併教室で開催され，加藤校長（温山会長）以下，渡部善次郎，一柳学俊ら教授陣が出席し，星野通も出席した⁵⁶⁾

不況のため，1931年度以降，教員の留学派遣が中断した。だから，前年の田中忠夫の留学が最後で，村川澄，星野通，大鳥居蕃らの少壮教授は留学できなくなった。星野通の留学先はドイツで下宿先も決まっていたが，ドイツの情勢不安もあり，中止となった（神森智先生より聞き取り）。

54) 『松山高商新聞』第56号，昭和5年7月25日。

55) 『松山高商新聞』第58号，昭和5年10月31日，同，第59号，昭和5年11月25日。

56) 『松山高商新聞』第63号，昭和6年3月25日。

7) 1931 (昭和6) 年度

1931年度の校務も一柳学俊が教務課長を、渡部善次郎が生徒課長を務め、加藤彰廉校長を補佐していた。

1931年度の入試が3月27、28日に行なわれ（本年度から定員が250名から300名に増員）、募集人員は100名で志願者は前年より回復し、413名で、4月初めに合格発表を行なった。

4月11日に入学式を挙行し、110名が入学した。ただ、加藤彰廉校長は3月23日以降から感冒で病臥し、入学式に出席できず、代わって教頭の渡部善次郎教授が式辞を述べた。なお、加藤校長はその後回復し、4月14日以降校務に復帰した⁵⁷⁾

1931年度の星野通の授業科目は、例年と同様、法律科目とドイツ語であるが、本年度からの新しいカリキュラム改革の一環で選択科目として労働法を担当するようになった⁵⁸⁾

5月30日、一柳学俊が岡山県立笠岡商業学校長に赴任のため、退職した。一柳学俊は愛知県の出身で、京都帝大を卒業し、文学士にして法学士の学位を有し、1924（大正13）年に赴任し、高潔な人格、深遠博識な学識を有し、温和な性格で父の如く慕われ、また、図書課長、教務課長（佐伯光雄の留学に伴う後任、1927年10月3日～31年5月30日）を務め、また、新聞学会副会長、経友会顧問、講演部長、文芸部長、山岳部長、国際連盟協会副支部長などを歴任し、また、仏教青年会の委嘱を受け、松高の北川淳一郎教授と共に東奔西走講演し、社会教育、啓蒙活動を行なうなど、本校にとってかけがえない人であった⁵⁹⁾

なお、一柳学俊退職に伴う後任の法律担当者は採用していない。また、後任の教務課長には、前教務課長の佐伯光雄の復帰ではなく、なぜか生徒課長の渡

57) 『松山高商新聞』第64号、昭和6年4月25日。

58) 同。

59) 『松山高商新聞』第65号、昭和6年5月25日。なお、後、一柳学俊は新潟商業学校長に転任する。

部善次郎が兼務した（6月16日から）。

8月、『松山高商新聞』の編輯子が教授陣に夏休みをどう過ごすかを聞いている。星野通は庭球部長として福岡の大会に引率した後、松山高校にてドイツ語の講習会に出て、ラートブルフの *Einführung in die Rechtswissenschaft* を読み、後は海水浴や魚釣りをするなど答えている⁶⁰⁾。なお、グスタフ・ラートブルフ（Gustav Radbruch 1878～1949）はドイツの法哲学者・刑法学者であり、キール大学、ハイデルブルグ大学の正教授を務め、社会民主党に属し、1922-23年にはシュトレゼマン内閣の司法相を務めた人物であった。

1931（昭和6）年9月18日、関東軍が満州事変を起こし、10月にはまた軍部によるクーデター計画（未遂）がおき、不穏時代が続いた。

そんな中、9月、地方紙に「加藤校長が辞意を洩らす」という記事が載った。それは、加藤校長が持病のリウマチのために健康がすぐれないので機をみて後進に途を譲りたいと述べたことが誤り伝えられたもので、今直ぐ辞意と言うわけではないとのことであった。なお、加藤校長は毎日登校して校務に当たられている⁶¹⁾。ただ、いずれ近いうちに加藤彰廉校長辞職の予感であった。

さらに、教頭の渡部善次郎（生徒課長と教務課長を兼務）が体調を崩し、1931（昭和6）年10月上京し、東京帝大の真鍋嘉一郎教授（愛媛県新居郡大町村生まれ）の診察を受け、神奈川の七沢温泉の楢元館で静養している。なお渡部善次郎は静養を終え10月21日に帰郷した⁶²⁾。

なお、中央政界の状況であるが、12月11日満州事変が政界に波瀾をよび、若槻礼次郎民政党内閣が閣内不一致から総辞職し、12月13日に犬養毅政友会内閣に代わった。高橋是清が大蔵大臣に就任し、それまでの井上財政を転換し、金解禁再禁止、国債の日銀引き受け、財政拡大、金利引き下げ、低為替政策による輸出拡大等により出した。

60) 『松山高商新聞』第67号、昭和6年8月1日。

61) 『松山高商新聞』第68号、昭和6年9月25日。

62) 『松山高商新聞』第69号、昭和6年10月28日。

1932（昭和7）年初頭の『松山高商新聞』の1月号に、「新春に何を語る教授陣に聞く年頭所感」が掲載され、星野通も次のごとく答えている。

「先生になってここに七年。此学校へ参りましてから来春で丁度満七年になりました。年改まって格別新しい所感も湧きませぬが、只年の流れのあはたゞしさ丈はしみじみと感じられます。若さの失はれない内に、頭の弾力性のなくなる今のうちにもっともっと勉強したい気持ちで一杯です」⁶³⁾

このように、国内外情勢の切迫下の中でも、星野通はひたすら勉強したいと願っていたことがわかる。

さて、世の中は1932年の犬養内閣下、さらに不穏時代が続いた。1月18日に、前年の陸軍の満州事変に呼応して、海軍が上海事変（第1次）を起し戦火をひろげた。そして、世界の目が上海に注がれている間に、関東軍は全満州攻略作戦を進め、3月1日に満州国を建国し、事実上日本の植民地にした。他方、国内では高橋財政下、景気回復の兆しが見られ始めたが、なお不景気が続き、特に農村の疲弊は深刻であり、そんな中、2月9日には衆議院選挙の応援演説に向かう途中に前蔵相の井上準之助が右翼団体血盟団により暗殺され、3月5日には三井財閥の総帥・団琢磨も血盟団に暗殺されるなどした。

そのような内外情勢騒然とした中、3月8日に、松山高商第7回卒業式が挙行された。卒業生は71名であった（後、追試で92名）。就職先は時運を反映し、満州、朝鮮、大阪方面にも就職した。加藤彰廉校長は訓辞の中で、今日重大な国難に直面しているが、この国難をおそれず、打ち勝ち、邁進し、志を四海に馳せ、国威の発揚、国力の充実、国運の隆盛に努力することを望むと述べた⁶⁴⁾。校訓「三実主義」は忠君愛国・忠君報国の人材育成でもあった。

63) 『松山高商新聞』第71号、昭和7年1月1日。

64) 『松山高商新聞』第73号、昭和7年3月8日。

また、本校では時局に呼応・迎合し、教授・生徒よりなる時局委員会を組織した。教授会側より大鳥居蕃、村川澄とともに星野通が委員に選ばれている。その具体的活動は、愛媛号の献金、戦死傷者の慰問、等であった⁶⁵⁾

8) 1932（昭和7）年度

1932年度の校務は教務課長の渡部善次郎が体調不良のため、佐伯光雄に代わった（3月24日より）。なお、生徒課長は渡部善次郎が続けた。

1932年度の入学試験は3月27日、28日に行なわれ、募集人員は100名で、志願者は前年よりも減少したものの、360名であった。そして、4月はじめに合格発表があり、11日に入学式が挙行され、116名（中学出身92名、商業出身24名）が入学した⁶⁶⁾

1932年度の星野通の授業科目は前年と同様で法律科目とドイツ語であった。また、クラス担当は2年のA組であった。

4月9日に星野通は、高橋始と共に3年生を率いて松山刑務所の見学をした。

4月23日、ドイツに留学していた田中忠夫が2年間の留学を終えて帰国した。

5月15日、犬養首相が暗殺されるという大事件がおき、政党内閣の崩壊となり、以後、日本の軍国主義化がすすんでいった。

7月12日、星野通は庭球部員を引き連れ、九州帝大主催の全国高専庭球大会西部予選に出張した⁶⁷⁾

後期より星野通は選択科目として、訴訟法を担当することになった⁶⁸⁾

1932（昭和7）年10月、星野通は松山高等学校教授理学士の橋本吉郎と共著で『化学独逸語解釈研究』を太陽堂書店から出版した。ドイツ語が化学研究者にとって不可欠の語学であり、独文の化学書の研究のために、また大学入試

65) 同。

66) 『松山高商新聞』第74号、昭和7年4月24日。

67) 『松山高商新聞』第77号、昭和7年7月10日。

68) 『松山高商新聞』第79号、昭和7年10月29日。

の便宜のために出版したものであった。354頁の著作であった。その目次は次の如くである。

「第一部 講義編

第一章 前置詞

第二章 常用動詞

第三章 常用分離動詞

第四章 常用化学動詞

第五章 接続詞

第二部 練習編

第一章 化学史

第二章 化学緒論

第三章 理論化学

第四章 無機化学

第五章 有機化学

第三部 応用編

第四部 独習編

附録

附録第一 略語

附録第二 化学命名法

附録第三 大学入試問題」⁶⁹⁾

なお、これも、星野通は著作目録に掲載していない。

1933（昭和8）年1月1日、加藤彰廉校長は年頭所感を『松山高商新聞』に載せた。国難・非常時日本の打開を生徒の奮闘に期待するものあった⁷⁰⁾

69) 橋本吉郎・星野通共著『化学独逸語解釈研究』太陽堂書店、昭和7年10月より。

70) 『松山高商新聞』第80号、昭和8年1月1日。

加藤彰廉校長の国難・非常時打開論に対し、星野通の1933年の年頭所感は「レコードも儉約するか」と、次の如く覚めたものであった。

「年改まって別に感慨新たなるものもありません。比較的日常の生活に無関心な我々学徒もインフレーション景気の物価高騰には極端に感ぜざるを得ませんが、これもサラリーマン全部の運命と思へば是非もない事。只黙して勉強を続けていくのみです。只、時々楽しみに買って居たレコードも儉約しなければならないのは少々悲哀ですね」⁷¹⁾

1933（昭和8）年3月8日、第8回卒業式が挙行され、76名が卒業した（後、追試で90名）。インフレ景気を反映し、就職状況は昨年よりずっと良好となった。⁷²⁾

9）1933（昭和8）年度

1933年度の校務は佐伯光雄が教務課長を、渡部善次郎が生徒課長を続け、加藤校長を補佐した。

1933年度の入試は3月末に行なわれ、募集人員は100名で、インフレ景気の為に志願者は384名で前年より増えた。4月初めに合格発表が行なわれ、10日に入学式が挙行され、108名が入学した。加藤校長は校訓「三実主義」を訓示して、時局多難の折柄、後日実業界に雄飛せんとする生徒に対し、覚悟を促し精励せよと訓示した⁷³⁾

本年度の星野通の授業科目は前年と同様に法律科目とドイツ語で、選択科目は信託であった。また、クラス担当は2年のB組であった。

4月11日、一昨年夏以来軽微な脳溢血で治療を続けながら校務、授業に従

71) 同。

72) 『松山高商新聞』第82号、昭和8年3月8日。

73) 『松山高商新聞』第83号、昭和8年4月12日。

事していた渡部善次郎（教頭で生徒課長）が、健康回復ならず、退職した。大きな損失であった⁷⁴⁾

渡部善次郎の退職に伴い、加藤彰廉校長は後任の新生徒課長にドイツ留学から帰ったばかりの田中忠夫を任命した（5月4日より）。

さらに悪いことに、本年5月ころから、加藤彰廉校長も体調不良になった。校医菅井医師によると、校長の病気は、本校開設当時に既に関節リュウマチを患っていたが、その後、気管支カタルを患い、本年5月には胃腸病も併発した。加藤校長は5月上、中旬は時々学校に出勤し、事務もとっていたが、5月下旬から熱が38度台となり、6月にも発熱が続き、欠勤となった。7月は37度5、6分にながったが、微熱がとれず、衰弱の様子であった⁷⁵⁾

6月1日、星野通は3年生を引率して松山刑務所見学にいった。また、7月12日からは庭球部を率いて九州に遠征した⁷⁶⁾

8月の猛暑の時期、病弱の加藤校長には打撃であった。左下腹部に腸間膜リンパ炎が襲い、継続的に痛みが続き、菅井医師が往診の度に痛いといわれていた⁷⁷⁾

8月31日、病床にある加藤校長は教務課長の佐伯光雄と生徒課長の田中忠夫を招き、学校の後事を託した。

9月17日、死去の前日、加藤校長は佐伯光雄と板東富男（本校の創立者・新田長次郎の秘書）を招き、遺言（次の校長は東京商大教授の山内正瞭先生）を伝えた。

9月18日午前11時20分、遂に加藤彰廉校長が死去した。

9月21日午後1時、本校大講堂において校葬が行なわれ、新田長次郎、平沼淑郎ら2,000余名が出席した。井上要葬儀委員長、また、新田長次郎等が弔辞を述べた。墓は常信寺にある⁷⁸⁾

74) 『松山高商新聞』第83号、昭和8年4月12日。

75) 『松山高商新聞』第86号、昭和8年7月11日。

76) 『松山高商新聞』第85号、昭和8年6月11日。同、第86号、昭和8年7月11日。

77) 『松山高商新聞』第87号、昭和8年9月18日。

第2節 渡部善次郎校長時代

加藤彰廉校長の後、第2代校長に就任したのが、病気退職していた渡部善次郎⁷⁹⁾であった。渡部校長の起用を決めたのは、井上要理事で、創立者の新田長次郎の了解を得て決定した。1933（昭和8）年10月26日に井上理事が渡部善次郎を帯同して来校し、教職員を前にして同氏を校長に起用したと通達し、直ちに講堂にて就任式が執り行なわれた。教授会の多くのメンバーは呆然とし、教務課長の佐伯光雄や古川洋三が異議を述べたが、井上理事に押し切られた。そこで、教授会側は一旦決まった以上、事を荒立てるより病弱な新校長を扶けて学園護持をはかろうと健気な態度で事に当たることにした。

渡部新校長下の校務体制は、佐伯光雄が教務課長を、田中忠夫が生徒課長を引き続き務め、補佐した。

そして、渡部校長の下で、定員増（1学年100名を150名に）の検討が始められ、また、加藤彰廉先生記念事業（銅像建設、追悼録、記念会館、奨学金等）が計画され、実行委員も選ばれた。実行委員は西依六八、村川澄、伊藤秀夫、渡辺良吉、増岡喜義で、星野通は選ばれていない⁸⁰⁾

1934（昭和9）年3月8日、第9回卒業式が行なわれ、86名が卒業した（後、追試で98名）。渡部校長が式辞を述べ、就職状況は良好であるが、それは本校学生の真価が評価されたこと、今日は非常時と言われているが、その突破には在学当時と同一の志操を把持する以外に良策なし、勤勉力行一意奉公の誠を尽くすようにと述べた⁸¹⁾

1934年度の入試が3月末に行なわれ、定員100名に対し志願者は479名

78) 『松山高商新聞』第88号、昭和8年10月27日。

79) 渡部善次郎は1878（明治11）年4月6日温泉郡南吉井村生まれ、早稲田大学専門部を卒業し、エール大学に入学し、マスター・オブ・アーツの学位を取得、帰国語東洋拓殖大学に勤務し、1920（大正9）年帰郷し、松山高校講師（非常勤）、海南新聞主筆を経て、1923（大正12）年4月松山高商教授。教頭、生徒課長、教務課長を務め、1933（昭和8）年4月10日、病気のため退職していた（拙著『前掲書』231～247頁）。

80) 『松山高商新聞』第91号、昭和9年2月19日。

81) 『松山高商新聞』第92号、昭和9年3月8日。

で、前年を大幅に上回った。入試で星野通は国語を採点している（おそらく、出題も国語）。星野の採点評が『松山高商新聞』に載っている。

「小生は国語の一番を採点。芭蕉の『奥の細道』から出た問。比して著しく悪く、殊に『所々の風景過さず思ひつづけて折節あはれなる作意など聞ゆ』は一人の正解者もなかった。之れと言ふのもその前にでて居る金沢の北枝が俳人であることに気付かなかったためである。成績逐年低下の傾向にあるは一つは問題が年々難しくなるによるかも知れないが、受験生の間に於て英語数学等彼等の所謂主要学科なるものが偏重されすぎて、肝心の国語の勉強が勢ひ疎かになったためでもあらふ。日本人が日本語を正しく解し得ない様では幾ら英語が上手でもまことに困ったものである」⁸²⁾

そして、入試作業が終わった直後の3月31日、渡部善次郎校長は遺恨が残っていたのだろう、佐伯光雄教授（教務課長）を解雇する行動に出た。

さらに、渡部校長は1934（昭和9）年4月1日、学内空気を一新すべく人事の大異動も行なった。学外講師を整理して専任講師（菅原義孝、田村清寿、国田要）を採用した。菅原、田村はともに卒業生であった。

渡部校長は新校務体制として生徒課長の田中忠夫を新教務課長に、大鳥居蕃を田中忠夫の後任の新生徒課長に、渡辺良吉を会計課長に任命した。また、新たに人事課と庶務課を設け、村川澄を人事課長に、西依六八を庶務課長に任命し、人事を一新した。星野通は大鳥居より赴任が早く且つ年上であるが、選ばれず、大鳥居が生徒課長に拔擢された。

さらに渡部校長は校友会の各部長も全面的に大更迭した。星野通はそれまで庭球部長であったが、剣道部長になった。またカリキュラムも改正し、従来選抜科目であった海運論と経済政策を必修科目にした（海運論は交通論と名称変

82) 『松山高商新聞』第93号、昭和9年4月25日。

更。交通論は古川洋三，経済政策は田中忠夫が担当⁸³⁾

渡部校長の下，1934（昭和9）年4月10日，第11回入学式が行なわれ，130余名が入学した。渡部校長は式辞で新入生諸君が難関を突破したことを祝し，今日からは高商生として常に学校の名譽を思い，大いに勉強されたい，と述べた⁸⁴⁾

本年度の星野通の授業科目は前年と同様である。

学園は平穩であるかに見えた。ところが，5月23日，ある卒業生による渡部校長拉致・監禁事件が起き，校長辞職を強要され，渡部善次郎は5月30日校長を辞職した。それが新聞に大きく報道され，本校創立以来の未曾有の大不祥事事件となった。

渡部校長辞職後，理事会は5月30日，教務課長の田中忠夫を校長代理に任命した。そして再び次期校長選びとなった。田中校長代理は故加藤校長の遺言に従い東京商科大学教授の山内正瞭先生を訪れ校長就任を依頼したが断られ，大阪に創立者の新田長次郎を訪ね，山内先生に断られた旨を報告した。そこで，新田長次郎は9月下旬に井上要理事を呼び，その協議の結果，次の校長は教授会の推薦を待ちたいということになった。井上要は帰松後，年長の西依六八教授を呼び，後任校長は教授会の意向を聞くと告げた。そこで，西依教授は直ちに教授会を招集し，教授会は一致して田中忠夫を校長に推薦することになり，その旨井上要理事に報告した。井上理事は教授会の意向を諒解し，10月5日に評議員会，理事会を招集し，田中忠夫を後任校長にすることを諮り，決定した⁸⁵⁾

なお，この渡部校長拉致監禁事件から田中忠夫が第3代校長就任に至る状況については，拙著『前掲書』第3章に詳述しているので，参照されたい。

まだ，次の校長が決まらない学園の混乱時であるが，星野通は『松山高商新

83) 同。

84) 同。

85) 『松山高商新聞』第98号，昭和9年10月30日。

聞』第96号（昭和9年7月13日）に「所有権の濫用」について、次のような小論を掲載した。それは、ローマ法以来の近代社会の所有権絶対論に対し、他人に損害を与える所有権の無制限的権利行使を禁止する（シカーネ）論を紹介している。星野通も同様の見解であったとみられよう。

「日常の私人相互の生活関係を規律する法律制度が極端な個人主義、権利本位の思想の上にきづかれて居たローマでは『自己の権利を行使するのは何人に対しても不法を行ふものでない』と言ふ指導原理、換言すれば権利行使に関する絶対性の原則が何人も疑を挟む余地のない自明の理として私法の世界を支配していた。而して私権の中でも殊にドミニウムは物を自由に用益処分し得る排他的権能であること今日の所有権と同様であったが、その限界、円満性、絶対性の色彩はきはめて強烈であって、権利行使の限界は無制限且自由とされ、今日の変遷によって一般にベトーネンさる如き権能に伴ふ社会的義務の内在など言ふことは寸毫も顧慮されなかったのである。此ローマ法的伝統は近代各国私法にそのまま受けつがれ、フランスに於てアンシャンレジームに対する反動として自由平等天賦人權等を教へる自然法学的思想が人權宣言、或はそれにうちつづく法典編纂に於て個人権利の絶対的不可侵性を形式化して以来、それは全く不可疑の原則として承認され、ギールケの所謂『ローマ法以上にロマネスティッシュな十九世紀法律案』は、権利に関し殊に所有権に関し驚くべき抽象的権能の過重、権能本位の法律体系を作り出したのである。

時代とともにその度を増して行く取引の頻繁性、社会関係の複雑綜合化は権利意識の明瞭と権利保護の伸長とを招致せざるを得なかったが故に近世私法の発達がかかるロマネスティッシュな思想に依拠せざるを得なかったのは当然のことであったかも知れないが、後述する如く、権利殊に所有権が多分に社会的性質を有するとみることが妥当である以上、これに伴ふ社会的義務を基本として理解しつつ権利の本質その社会的職分をあきらか

にして行くべきものであり、従って権利の有する内容と社会的基礎とを全く度外視して、権利を単に権利として主張した十九世紀のローマ法的法律学にはイエーリングの所謂根本的誤謬 *eine grundirrige Ansicht* が存在していたのである。彼曰く『権利が権利者のためにのみ存在し而もそれを私法制度の面目かの如く考へる思想は所有権に於て最も適切なる定型を発見する。それは法律家の間の通説であり又一般私人の考へ方であって、所有権の本質は所有者の物に対する無制限的支配力を意味するものとされたが、それは私見によれば根本的の謬見である』と。

さればこそ人口今日に比すればきはめて稀薄であり、経済取引、諸生活関係未だ今日程に錯雑して居なかつた古代ローマに於てすらこの所有権絶対性の原則を徹底に貫くときは、美はしい互譲互助を理想とする人間の社会、殊に隣人相互の所謂相隣関係はいたる処に於て相剋のあさましい現象を引き起こして共同生活の円満、円滑は期すべくもなかつたのである。現に今日に伝はるローマの法律文献によれば、権利行使の絶対性無制限性が隣人相關の現象を各所に生じ、判公諸公を苦しめた例が二三にとゞまらなかつたのである。曰く、或人は自己の土地に井戸を穿つことによってその隣人の水源を枯渇せしめた。又或人は極端に高き建物を造ることによって隣人を悩ました。又或人は己の飼う蜜蜂が隣人の花園に飛込んでこれをひどくあらした。或は湯屋の煤煙や湯気が隣家に迷惑を及ぼし、住家にある便所の臭気が朝夕その隣人を悩まし、工場の音響は隣家の人達を神経衰弱にした。かゝる事件を取扱ったローマの学説或は判例は今猶今日に残って我等の無限の興趣をそそるのである。

処が物の考へ方が極端な個人主義であり、個人所有権の絶対性を不可疑の原理として確信していたローマの判官は、かかる事件の解決も個人主義的イデオロギーの域を一步も出て居なかつたのである。換言すれば前述の『自己の権利を行ふ者は何人に対しても不法を行ふものでない』と言ふ指導原理を基礎にして、これから音響、臭気、煤煙等のイムミシヨ〔筆者

注：Immisson 公害〕その他の侵害の問題は解決されたのであった。甲は自己の土地に於て井戸をはるのは単なる所有権の行使であって何等不都合はないと主張する。これに対し水源枯渇を来した隣人乙は水の使用をさまたげられたのは個人所有権の侵害行為だと突張る。又或は自分の土地で蜜蜂を飼うのは所有権行使の一つの形態に過ぎないのであって決して不法ではないと主張するに対し、隣人は土地所有権は地下は地軸にとどき、上は天上に達すとの理由によって隣家の蜜蜂が自分の土地に飛び込むは土地所有権の侵害だと言ふ。高層建築、便所の臭気、音響、煤煙等の問題に於て、同様のロゼックによりて侵害者は自己の行為を正当化せんとし、被害者は侵害停止損害賠償を請求せんとする。この問題解決に対しローマの法官はシカーネ（Schikane）禁止の法理を以て望んだのである。シカーネとは一般に独逸法学者によって定義さるる如く他人に損害をあたふる事を目的としてなさるる行為（Handlung mit Schädigungszweck）の意であって、人類生活関係、殊に相隣関係に於て権利者の悪意を以てなさるる無制限の権利行使を許すことは法律本来の高遠な理想に背くものとし、此シカーネは禁止されたのであった。従て仮令それが外観上適法なる所有権行使の如く見ゆる場合であっても、実際は隣人を害することを目的としてなされたことが明白な場合にはその権利行使は禁止され、被害者には救済があたへられたのであった。換言すれば権利行使の限界の無制限は原則として承認され、殊に所有権の無制限的絶対性は何人もうたがひ得ない自明の理として認められて居たが、その原理の厳格なる解釈適用が隣人侵害の結果を生じ、社会的事情に鑑み法律本来の理想に背馳する場合には、シカーネ禁止の法理をアプライすることによって被害者を救はんとしたのであった。権利を社会的性質を有する利益と考へ、社会的義務を基本として理解して行く二十世紀の進歩的法律思想の上に立つ権利濫用の理論と行き方こそ違って居るが、此シカーネ禁止こそは権利行使無制限性に対する反撃の先駆者だったと言ひ得るのである。（未了）⁸⁶⁾

7月中旬，星野通は東京に行き，生徒のために就職運動をしている。他の教授陣も同様である⁸⁷⁾

『松山高商新聞』は教授に夏休み中の過ごし方について聞いている。星野通は「七月中旬に上京，月末まで滞在。八月の暑き盛りは家で昼寝と読書，時々子供と海へでも行きたいと考えています」⁸⁸⁾などと答えている。

（続く）

86) 『松山高商新聞』第96号，昭和9年7月13日。

87) 同。

88) 同。